
葛根湯

条文

第31条 太陽病，項背強几几，無汗，惡風，葛根湯主之。

方 葛根四兩 麻黃三兩去節 桂枝二兩去皮 生姜三兩切
甘草二兩炙 芍藥二兩 大棗十二枚擘
上七味，以水一斗，先煮麻黃，葛根，減二升，去白沫，
內諸藥，煮取三升，去滓，溫服一升，覆取微似汗。
余如桂枝法將息及禁忌，諸湯皆倣此。

第32条 太陽与陽明合病者，必自下利，葛根湯主之。

第33条 太陽与陽明合病，不下利，但嘔者，葛根加半夏湯主之。

金匱・痙湿喝病脈証第二

第13条 太陽病，無汗，而小便反少，氣上衝胸，口噤不得語，欲
作剛痙，葛根湯主之。

参考：第1条 太陽之為病，脈浮，頭項強痛而惡寒。

葛根の入った処方

	葛根湯	桂枝加葛根湯	葛根芩連湯	奔豚湯	竹葉湯
葛 根	四両	四両	八両	五両	三両
麻 黄	三両				
桂 枝	二両	二両			一両
芍 薬	二両	二両		二両	
甘 草	二両	二両	二両	二両	一両
生 姜	三両	三両		四両	五両
大 棗	十二枚	十二枚			十五枚
黄 芩			三両	二両	
黄 連			三両		
芎 藭				二両	
当 帰				二両	
	(葛根加半夏湯)				
半 夏	半升			四両	
李根皮				一升	
竹 葉					一把
防 風					一両
桔 梗					一両
人 参					一両
附 子					一枚

葛 根

本經中：味甘平。治消渴。身大熱。嘔吐諸痺。起陰氣。解諸毒。葛穀治下利十歲已上。

別錄中：無毒。主治傷寒中風頭痛，解肌發表出汗，開腠理，療金瘡，止痛，脇風痛。生根汁，大寒，治消渴，傷寒壯熱。白葛，燒以粉瘡，止痛斷血。葉，主金瘡，止血。花，主消渴。

効 能

- ① 胃津を生じる。肌気中の津、脈外の気中の津を補う。その結果、肌・筋・肉を潤す。

本経：「主消渴」「起陰気」

- ② 胃の気津を胃→肌→腠理，胃→脈外の気→腠理へと外達させ，その過程で，肌・筋・肉に存在する邪および熱をとり去る。

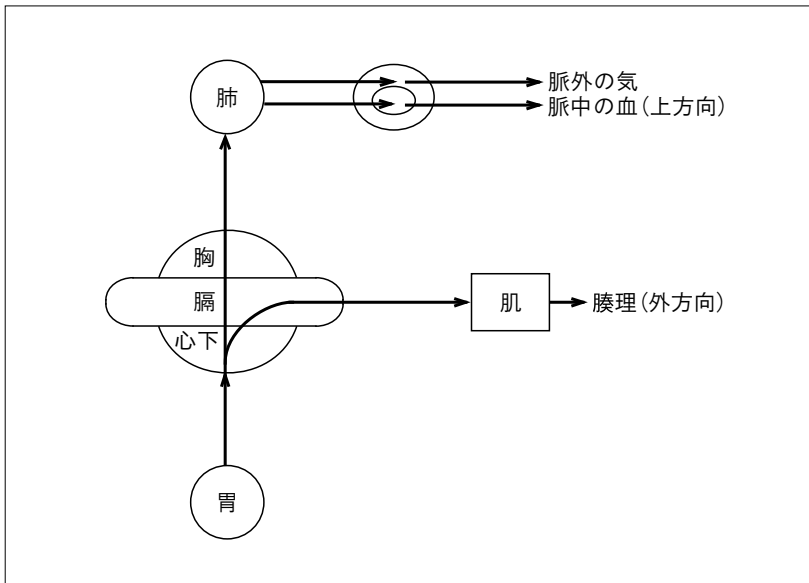
本経：「治身大熱」「治諸痺」

別録：「主治傷寒中風」「解肌發表出汗」「開腠理」

（栝楼根にも胃津を生じる作用はあるが，腠理まで外達させることはできない。栝楼根はむしろ膈の出入を円滑にすることにより肌を潤す）

- ③ 胃気を急速に外方向の肌に外達させ，また上方向の肺・心・心包に引き上げる。その結果，胃気が過剰に下方に向かうことにより生じる下痢，また胃気が過剰に腎に供給され，腎の気化能力を越えて上衝する奔豚を治す。

本経：「治嘔吐」「葛穀治下利十歳已上」



④ 膈の出入の円滑化

別録における「治脇風痛」は栝楼根と同様に膈の出入を調整する作用がある可能性を示唆している。

⑤ 「治諸痺」「療金瘡（外傷）」「止痛」および催乳作用などから、胃の気津を脈中の血、脈外の気へとつなげることがわかる。

◆治諸痺、療金瘡について

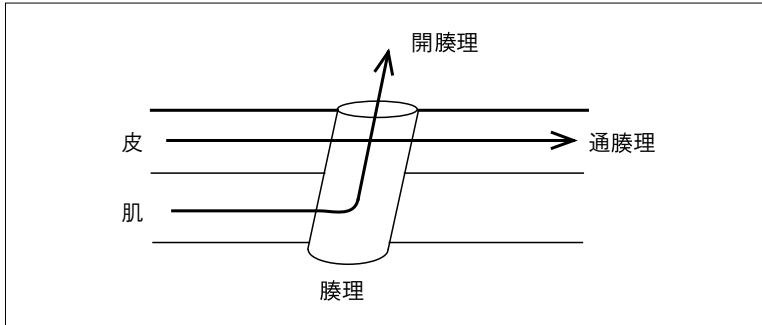
本経の中で治痺作用のある生薬は多く、その中の一部は去湿利水剤に属す。例えば朮、沢瀉、薏苡仁、車前子などである。一方、本経・別録二書の中で、治痺とともに療金瘡、続筋などの作用のあるものは牛膝、乾地黄、独活、防風、呉茱萸、(厚朴、) 萆薢、附子、沢蘭などがあげられる。

この中で萆薢は別録中に「関節老血」、沢蘭は本経中に「骨節中水」と、特殊な効能を載せているが、葛根を含めて、治痺、療金瘡、続筋の効能を持っている生薬の一部には、治痺と同時に通絡の作用を合わせ持つと考えることができる。これは、葛根の胃気を上方の心・心包に上げる作用（前出③）と胃津を生じる作用（前出①）を考え合わせれば、葛根は胃津を肌・筋・肉、また腠理まで運んで潤すと同時に、肌・筋・肉の湿を薬の組み合わせによってはとり去ることができるからである。

◆通腠理・開腠理について

葛根は桂枝と同じく外・上方の二方向性のベクトルを有する。桂枝と異なるのは、胃津を生じる作用があり、これを脈中の血・脈外の気および肌気・皮気・腠理に送り込むことができる点である。

通腠理とは、腠理を皮と平行して走ることであり、開腠理とは、腠理を皮・肌と垂直に走ることである。したがって二者の意味は異なっている。



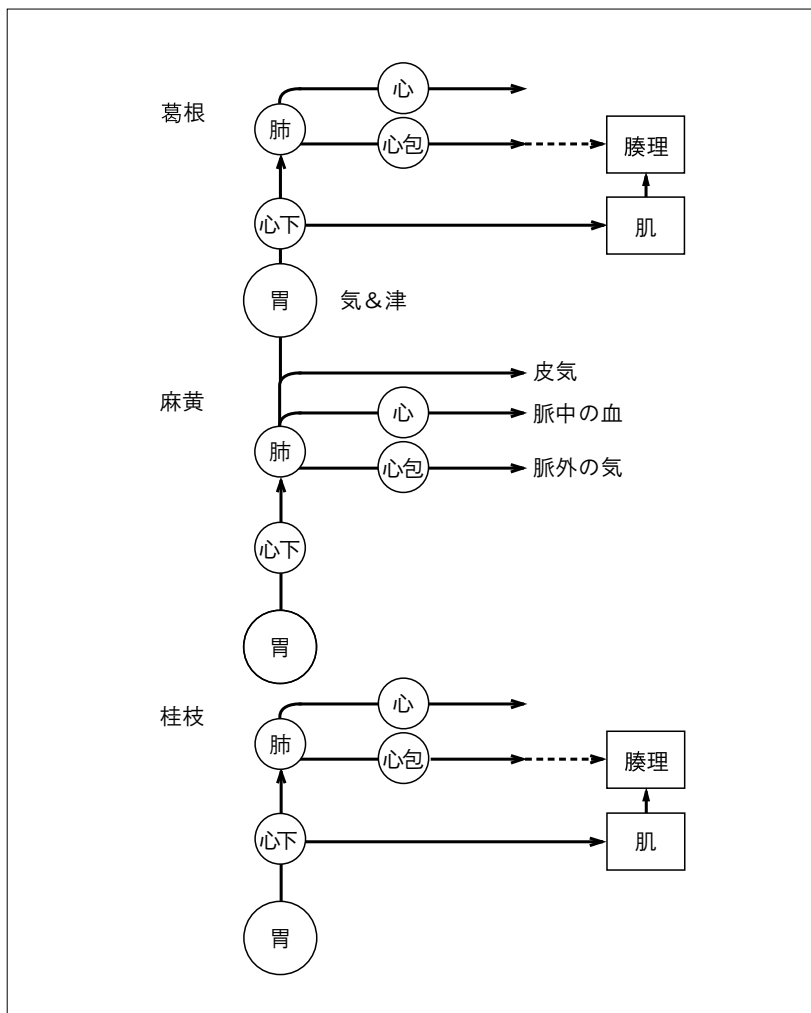
本経・別録において麻黄、防已は「通腠理」、葛根は「開腠理」、呉茱萸は「開腠理」とある。桂枝は菌桂・牡桂・桂のいずれも腠理への言及はないが、「出汗」作用が記されている。したがって桂枝についてあえて記すならば、開腠理作用を有することになる。

さらに附子は、甘草附子湯（甘草二両、附子炮二枚、白朮二両、桂枝四両）の投与後、熱粥の助けがなくても「得微汗」とあるので、やはり開腠理の作用を有すると考える。桂枝湯において、桂枝三両、生姜三両であるが、甘草附子湯は桂枝四両、附子二枚である。この二薬により脈外の気を強く推進し、その結果腠理を開いて発汗させる。また桂枝湯は、桂枝、生姜のみでは開腠理の作用が弱いので、熱粥を食べて胃気を助け、温めて外達力を高めている。一方、桂枝加葛根湯の場合は熱粥の助けがなくても外達が可能である。

桂枝・附子・葛根はそれぞれ開腠理作用を有する。

外達、発汗の作用は、下記のごとく二味、三味の組み合わせ、あるいは麻黄を加えるとその作用は強くなる。

桂枝＋麻黄	} にて開腠理、外達力、発汗力が強化される。
桂枝＋葛根	
桂枝＋附子	
桂枝＋麻黄＋葛根	
麻黄＋附子	



◆葛根と項背強について

葛根の効能は本経においては「治消渴。身大熱。嘔吐諸痺。起陰気。解諸毒。葛穀治下利十歳已上。」であり、特に「治項背強」の記載はない。筋・肉に対する津液の供給（脈外の気津、肌の気津）が一定不

足すると、不足の程度の著しい部分に「強（こわばり）」が出現する。人体の構造上、項および背部は津液の不足の影響を最も受けやすい場所であり、津液の不足の結果「項背強」が出現する。局所に対する津液の供給が不足する原因としては、①津液の不足と②湿による津液の供給障害の二種類がある。

- ① 胃の津不足 $\left[\begin{array}{l} \text{肌の津不足} \\ \text{脈外の津不足} \end{array} \right]$ 筋肉の津不足 → 強（こわばり）
- ② 肌・筋・肉の衛分に湿が存在すると、肌・筋・肉に対する津液の供給障害が生じる。そのため筋・肉の津不足が生じ、「強」が生じる。

したがって葛根を投与する目標として、必ずしも「項背強」が存在する必要はない。例えば傷寒・金匱のなかで葛根の入った五処方のうち、葛根黄芩黄連湯、竹葉湯、奔豚湯の三処方の条文には「項背強」の記載はない。また「欲作剛瘕」の葛根湯証には「項背強」ではなく「口噤不得語」とある。

[参考]

桂枝去桂加茯苓白朮湯（第28条）の「頭項強痛」は、湿により項部の筋が津液の供給を受けられず、「項強」が生じている。これをみても「項強」が湿によっても生じることが理解できる。

総論

葛根湯証・麻黄湯証・桂枝湯証における邪の比較

葛根湯証は風寒併重、麻黄湯証は寒邪重、桂枝湯証は風邪重である。

葛根湯：風邪	≒	寒邪
麻黄湯：風邪	<	寒邪
桂枝湯：風邪	>	寒邪

病邪の存在する場所

麻黄湯証は、皮・皮腠を寒邪が外束する。桂枝湯証は、肌の衛分に風邪が侵入する。葛根湯証は、皮を寒邪が外束し肌および筋・肉に風邪が侵入する。

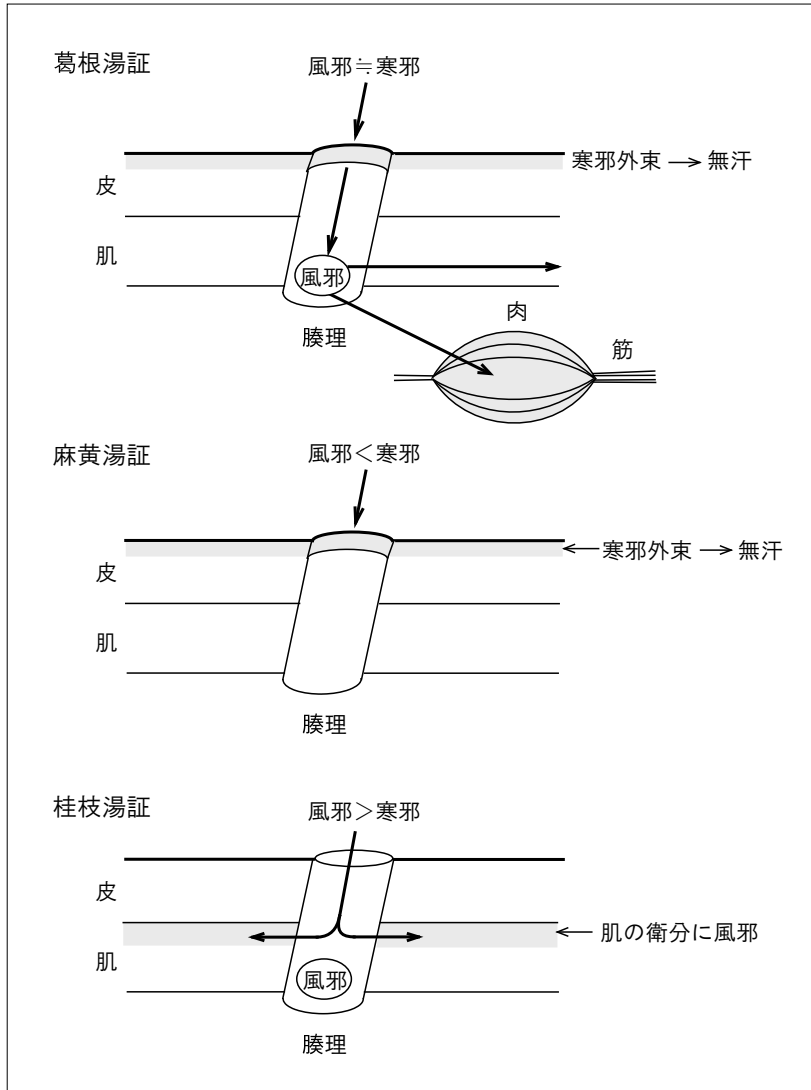
太陽病の桂枝湯証と麻黄湯証には「頭項強痛」があり、葛根湯証には「項背強」あるいは「口噤不得語」がある。「項背強」は「頭項強」に比し強（こわばり）の範囲、程度が著しい。この症候の違いにより、葛根湯証は、邪が皮に存在する麻黄湯証、邪が肌に存在する桂枝湯証とは異なる場所に邪が存在することがわかる。逆に桂枝湯証、麻黄湯証では「項強」は出現し得るが、けっして「項背強」あるいは「口噤」には至らないともいえる。葛根湯証は、寒邪が皮を外束し、風邪が肌から筋・肉の深さまで侵入して「項背強」「口噤」を呈すのである。

病邪の存在する場所

麻黄湯証	——	皮邪（頭項強）	}	葛根湯証（項背強）
桂枝湯証	——	肌邪（頭項強）		
		肉・筋邪		

（桂枝湯証の一部においては、風邪が肉の深さまで侵入するものもある。
：陽明の桂枝湯証）

一般的に太陽病は、邪が皮や肌に侵入し、正気の鼓舞により邪正闘争が惹起され、自然治癒するか、あるいは薬物により治癒する。治癒機転が働かなかった場合には、邪は表から裏に伝変し、白虎湯証などになる。しかし葛根湯証は病邪の特殊性（風寒併重、特に風邪が強力）により、皮には寒邪が外束し、肌・肉・筋まで風邪が侵入する。ただし同じ葛根湯証であっても、一般の葛根湯証と「欲作剛瘕」の葛根湯証では、筋・肉の深さにおける風邪の強さが違う。「欲作剛瘕」は筋・肉に強力な風邪が存在するため起こるのである。そして「欲作剛瘕」→「剛瘕」→「瘕病」というように病気が進展する可能性がある。



風邪の強さ

一般の葛根湯証： 皮・肌 (+) 肉・筋 (+)

「欲作剛痙」の葛根湯証： 皮・肌 (+) 肉・筋 (++)

処方解説

	葛根	麻黄	桂枝	芍薬	甘草	生姜	大棗	杏仁
葛根湯	四両	三両	二両	二両	二両	三両	十二枚	
桂枝湯			三両	三両	二両	三両	十二枚	
麻黄湯		三両	二両		二両			七十個

葛根湯は風寒併重ゆえに桂枝湯をベースに麻黄、葛根が加わる。麻黄湯と比較すると、麻黄、桂枝、炙甘草は両湯に入っており、麻黄湯の杏仁が葛根湯においては芍薬となっている。杏仁と芍薬は、ともに肺と腠理の肅降を行うことができる。したがって麻黄、桂枝、芍薬、甘草の組み合わせは麻黄湯の方意に限りなく近い。これらのことより葛根湯は、ほぼ桂枝湯＋麻黄湯に葛根が加えられたものと考えることができる。

葛根湯・麻黄湯・桂枝加葛根湯の比較

葛根・麻黄・桂枝の組み合わせによる気血の推進

- ① 葛根湯 : 葛根四両 麻黄三両 桂枝二両
- ② 麻黄湯 : ——— 麻黄三両 桂枝二両
- ③ 桂枝加葛根湯 : 葛根四両 ——— 桂枝二両

麻黄湯 : 胃 → 心下 → 胸 → 肺

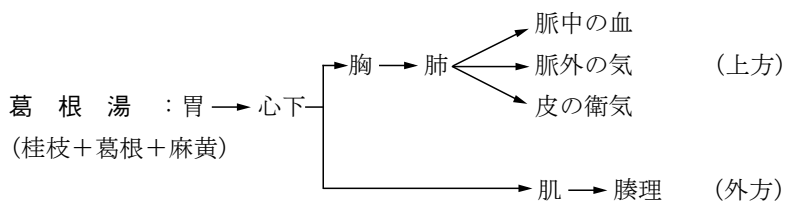
- 脈中の血
- 脈外の気 (上方)
- 皮の衛気

(桂枝＋麻黄)

桂枝加葛根湯 : 胃 → 心下

- 胸 → 肺
 - 脈中の血
 - 脈外の気 (上方)
 - 皮の衛気
- 肌 → 腠理 (外方)

(桂枝＋葛根)



葛根も桂枝と同じく上・外方のベクトルを有する。麻黄は上方へのベクトルを有する。したがって桂枝に葛根を加えれば、上・外方へのベクトルの強化になり、桂枝に葛根・麻黄を加えれば、上・外方のベクトルの強化、とりわけ上方への強化をはかることになる。ただし麻黄と桂枝を組み合わせた場合のベクトルは上方の肺・心包・心の方角に行き、外へ向かわない。

